

発表 6

Presentation 6

大阪市における沖縄出身者のまち
——集住・差別・まちづくり

水内 俊雄*

大阪市立大学

Formation of Okinawan Community and the Grass-rooted Struggle
against the Slum Clearance Project in Osaka

Toshio MIZUUCHI*

Osaka City University

In Taisho ward of Osaka city, Okinawan origin residents dominate one fourth of its population. This talk starts to show the historical development of Okinawan community just around the post-W.W.I in the 1920s and after by using monographs, biographies, memoirs and interviews. US Air bombing in 1945 damaged heavily in this ward, and in the post-war rehabilitation period, Okinawan community was revived rapidly despite the physically deteriorated conditions. Osaka city government had adopted a strong measure to rehabilitate these damaged areas by enforcing huge land readjustment project. Okinawan community in the style of barrack quarters was the target for the slum clearance in 1970s. Among the absence of housing reform movement, they struggled with the city bureaucracy following the manner of buraku liberation movement. Under the severe discrimination within the Japanese society, Osaka Okinawan's movement is worthy to note as the example of grass-rooted urban social movement.

ご紹介にあずかりました、大阪市大の水内と申します。私はオーガナイザーの堀先生から今回のシンポジウムでお話をいただいた時に、最初発表された大城さんのテーマでご依頼をいただきました。とても私ではその役目を果たせないということでお断り申し上げておりました。ところが、昨年、ひよんなことで大阪に在住の沖縄出身者の方々とおつきあいさせていただく機会がございまして、そのことの紹介で責を果たさせていただくということになりました。

そういう意味で私と沖縄との関わり、南の諸島との関わりというのは1年もなく、関

*E-mail address: mizuuchi@lit.osaka-cu.ac.jp

わりとしては非常に薄いものですが、先ほどの田島先生の話にありました出郷者の関係とも関わりまして、たとえば奄美の人口より、在阪の奄美出身者の人口の方が多いという現実もありますので、その方々がどのような生活世界を築いて来られたのかということをご紹介したいと思います。

私は住宅問題の方を専門にしているのですが、わたしの沖縄との関わりは、沖縄スラム、沖縄バラックと呼ばれる現象が1970年代まで存在していたことを知ったことに始まります。私はいま、同和地区の住環境改善というようなことに関わっている中で、同和事業というものは、鹿児島県庁の植村さんのお話にもあった公共土木事業のひとつと考えられます。従いまして同和事業は都市への、生活世界への大々的な公共土木事業であったという非常にまれな例になります。そういう都市への生活空間への公共事業がどのように行われてきたかという中で、沖縄バラック、沖縄スラムの扱いは非常に特異なプロセスをたどりました。1960年代末から70年代はじめにかけて、その中から沖縄の問題、逆にそれをつきつめていくと沖縄アイデンティティーとか沖縄差別ということが大きく問題化されていました。それが現在、ある意味で大阪、今日は大正区の話になりますが、大正区が今沖縄というものを積極的に打ち出していく、あらたなそういう地域アイデンティティーを大正区が沖縄を使って育てていくというような方向にも動きつつあることを含めて、少し歴史的にお話をさせていただきたいと思います。

今日のお話は、まず沖縄スラムというものが生まれた歴史的、空間的系譜について戦前にさかのぼってざっとご紹介したいと思います。そして、戦後の大正区に関して、そして1970年代始めのスラムクリアランスの経緯、そして最後にスラムクリアランスの中で住民の対抗運動がどのように生じたか、そしてそれが沖縄の地域アイデンティティーの発露とどのように結びついていったのかという順序でお話してゆきます。

何が問題かという、しばらくOHPでその地域のイメージをごらんください。これは大正区の南の方で、1910年の地図ですが、一つ、頭に入れておいていただきたいことは、大正区というのは全てが川や運河に囲まれた島であることです(図1)。沖縄の人はどこに移住してきたかという、北恩加島新田、小林新田のエリアに集中的にくることになります。大体3万人くらい、今でもこの人口の8万人のうちの2万人が沖縄の出身といわれているわけですが、実はこの場所の変遷をめぐる話です。明治時代は明らかにここは一面新田地帯でして、またほとんどなんの集落的痕跡もないというそういうエリアでした。実はここにそれから現在にかけて大阪市や民間企業の土木事業が大々的に投下されます。それは生活空間を作り出すために投下されるというよりは、港湾、それから高潮のために、防潮堤と港湾設備を作る、あるいは工場用地や貯木場といった産業基盤を作るという意味で、大々的に投下されるわけです。生活空間はそうした土木事業の中で細々と作り出されていったわけですが、それが沖縄の人、沖縄の人だけでなく、大正区に住んでいる生活空間を結果的にはずたずたにされてゆく、乱されてゆくということがおこります。

次にお見せるのはわずか10何年後かの1921年の地図ですが、少し前まで新田地帯だった部分に早くも市街地化の傾向が見えますが(図2)、一番重要なことは、この一帯に、大阪の長堀から材木市場が移ってきたことと、付随して運河や貯木場のネットワークが造られ、軒並みここが水面と化すというすごい事業がおきます。沖縄の人は、チェーンマイグレーションにあたる感じで、この木場で働くために集まってきます。これも昭和4年の地図ですが、ここで完全に運河、貯木場、材木街、小林材木街と材木市場が成立

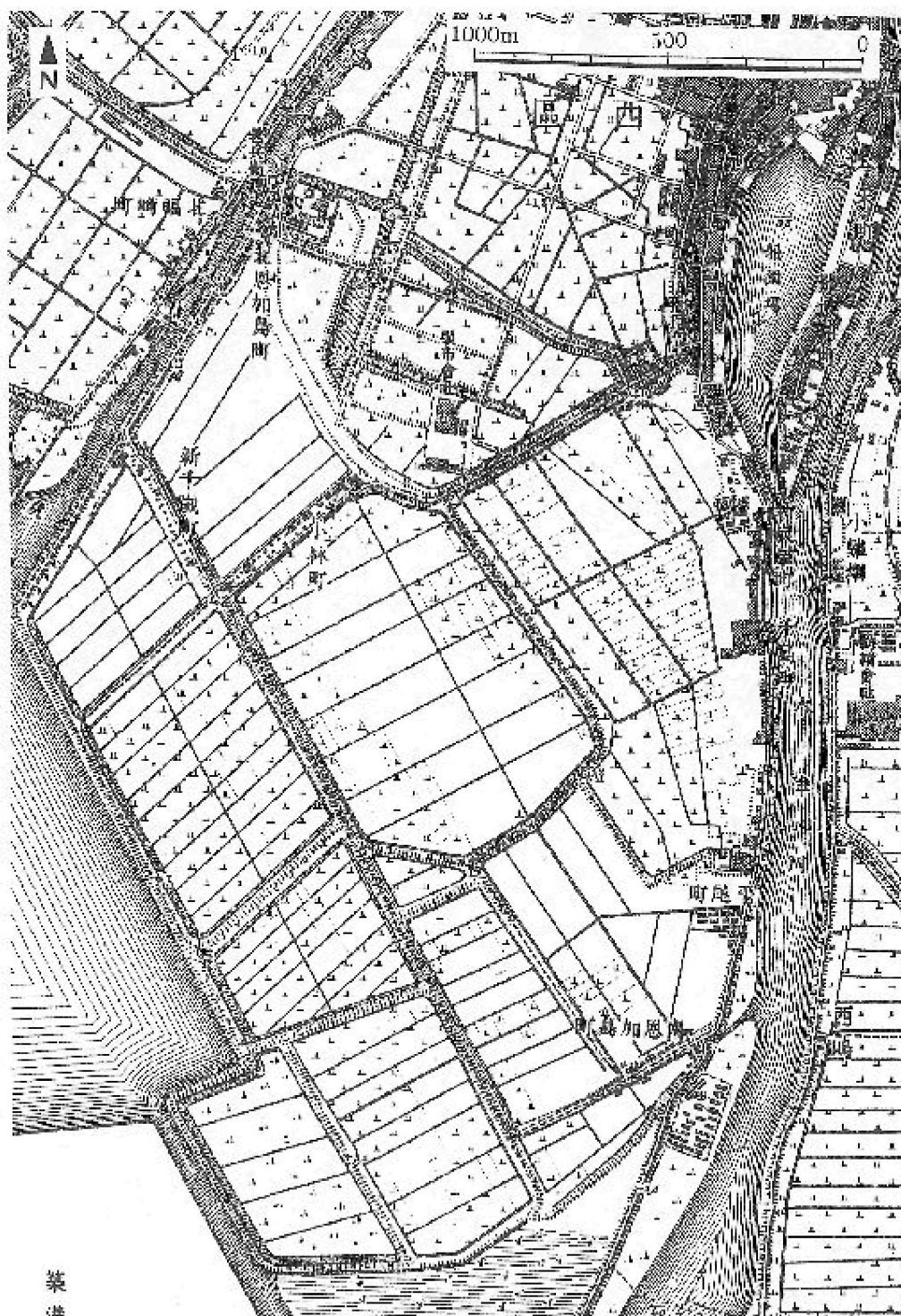


図1 地形図で見る1909年の大阪市大正区（明治42年測図2万分の1「大阪西南部」）

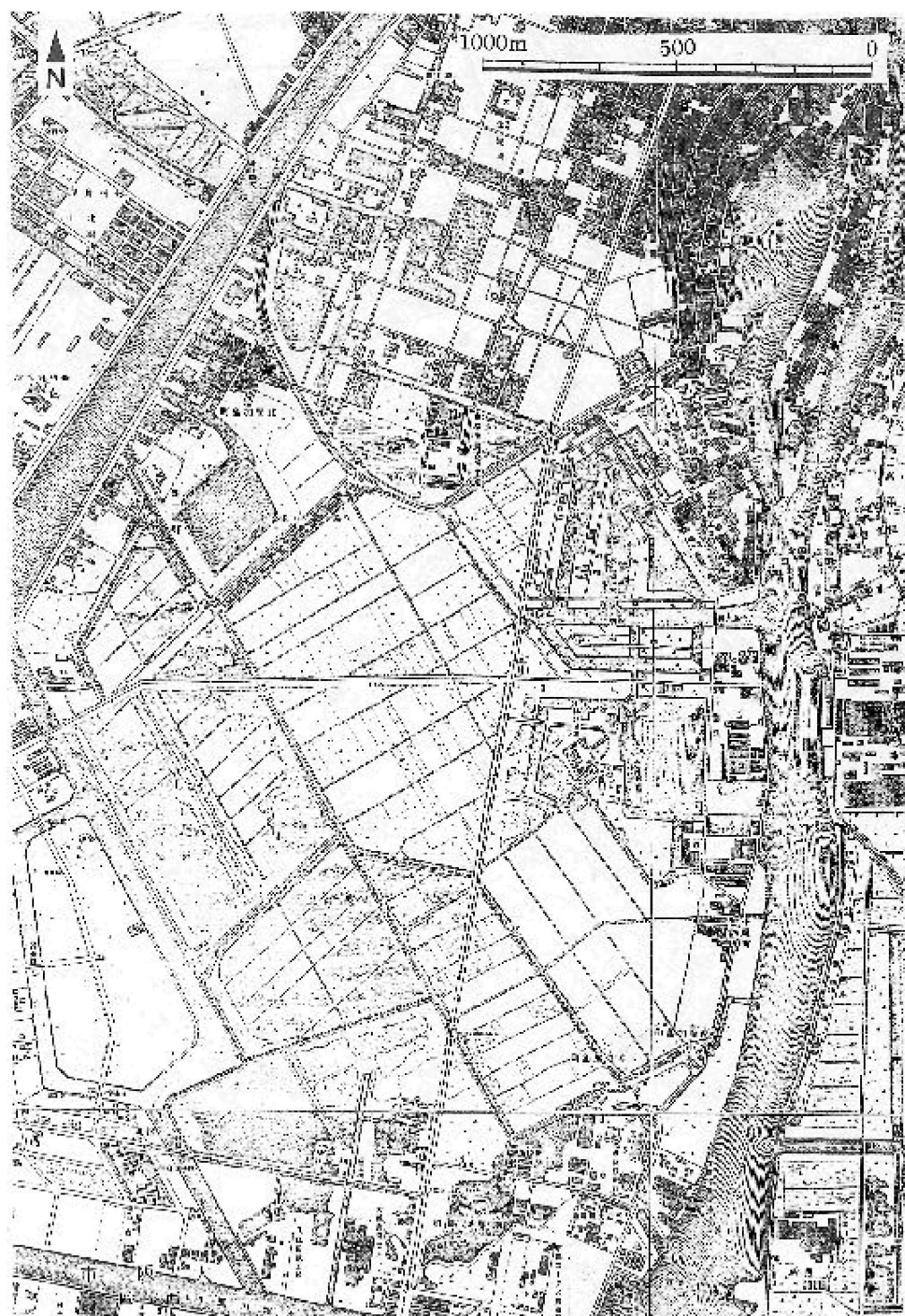


図2 地形図で見る1921年の大阪市大正区（大正10年測図1万分の1「大阪西南部」「大阪南部」「柴谷」「住吉」）

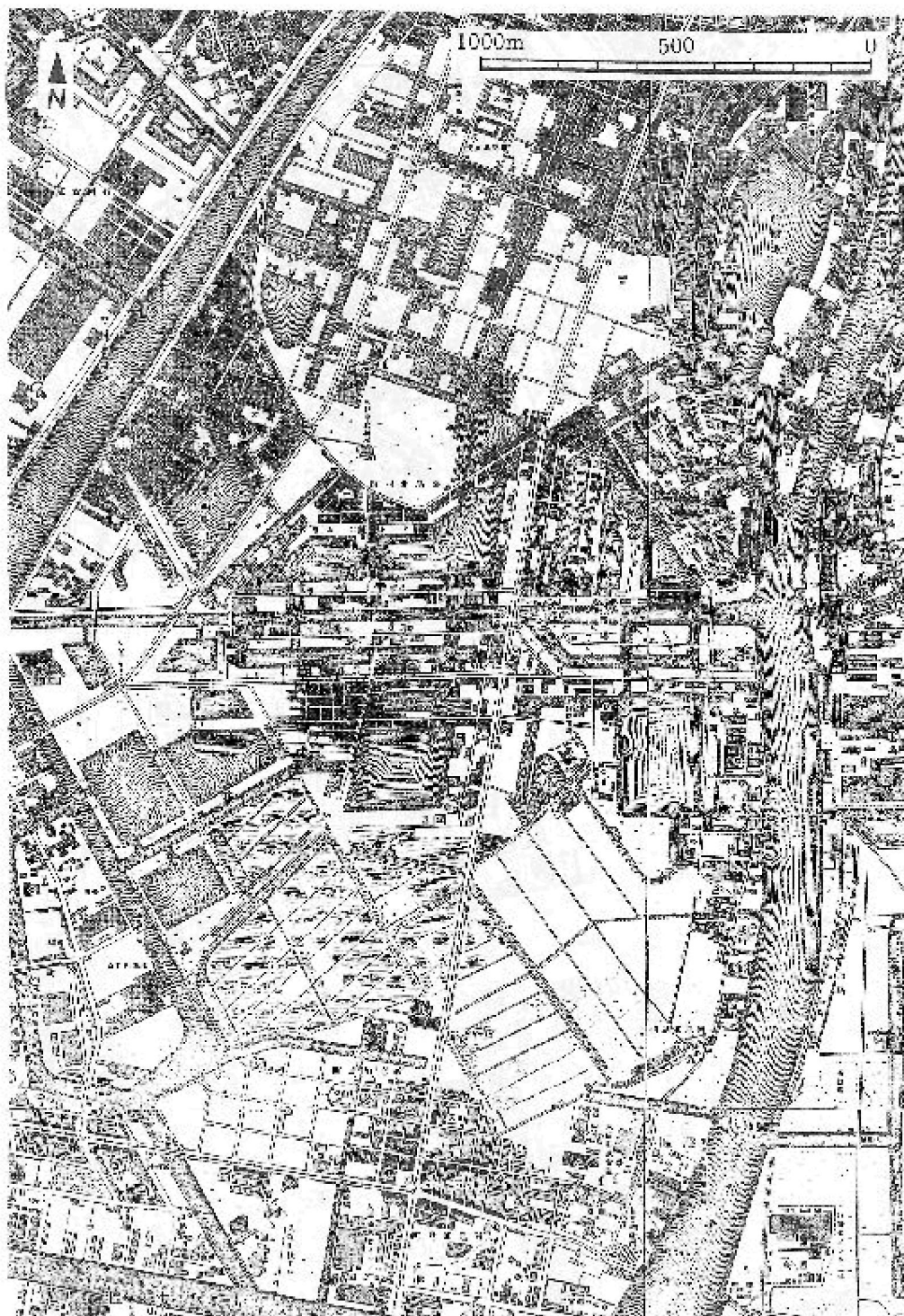


図3 地形図で見る1929年の大阪市大正区（昭和4年測図1万分の1「大阪西南部」「大阪南部」「柴谷」「住吉」）

します(図3)。沖縄の人はこの中の北恩加島がまさしく一番の集中地となり、朝鮮人も、木材業の盛んだった和歌山県の熊野の人たちといった日本各地の人々がここに集中し、朝鮮人と沖縄の人とあわせると当時の人口の3割以上が占められたということです。

4番目に、これは戦後すぐの1947年の空中写真ですが、北の方は空襲で焼かれます。材木市場のあたりは部分的に焼け残りが見えていますが、甚大な戦災を受けたことには変わりありません(図4)。しかし加えてここでまたすごい事が起こります。大正区は標高はもともと海拔以下、大体-1.5mです。今でも環状線の大正駅を降りるとわかりますが、水面より1m低いというところが地盤ですが、1950年のジェーン台風で区全体が冠水してしまうという甚大な被害を受け、復興事業であわせて全面的に土地のかさ上げをしようというすごい事業が起こります。3mか4mあげようという事業で、つい先年終った半世紀もかけた大事業でした。大正区の中南部一帯をかさ上げするということになり、その中でもこの材木市場を南の住之江区に移して、跡地に大正内港をつくろうという発想が出てきます。大阪は南港というベイエリアを持っていますが、戦争直後は、内港を見直そうという考え方が出てまいりました。大阪は基本的に河港でしたので、いまだに大正区や港区の港湾地帯には普通には橋がかけられません。橋を架けても船のマスト以上にあげないといけないというので、今でも渡し船ですが、一部は、螺旋状に取り付け道路を上らせてゆくような背の非常に高い橋の構造になっています。沖縄の人の居住の多い北恩加島では、鉄鋼埠頭を作ろうという話になり、結局話はどうなるかというと、ここに大量に居住していた沖縄の人達、内地の人も含めて、換地で集団移転をさせられる羽目になってしまいました。どこかをかさ上げして、移住してもらい、移転後は家を取っ払ってまたかさ上げし、というふうに、移転先はもとの場所からずいぶん離れて、水田が残っていたかなり南の平尾に移転する例が非常に多くなります。そして大反対していた材木街の人々も、やむなく住吉区に移ってしまいます。

これは現在の地図ですが、昔とは全然違う大正区になってしまいます(図5)。これが大正内港計画ということで、北恩加島という沖縄の人たちがたくさん住んでいた市街地の半分は海面下あるいは埠頭になってというふうに激変するということが、起こりました。ところが、ご多聞に漏れずこの公共土木事業は、基本的には生活空間のためにはなんらかの援助をおこなうということでは、道を作ることと公園を作る以外はやりません。あとは半分近く土地を減歩させられた上に、自力で家を移動させて、勿論補償料はありますが、移動させてやってくれと、まあ、血のにじむようなことが行われたわけです。これは大正区だけではなく、たとえば与論島出身の人たちが多く住まわれていた港区、あるいは此花区というふうに、いずれも土地のかさ上げをしたので、今まで築き上げてきた生活空間を一から作り直さなければならないといった、そういう住民側に怨念の残るような事業がおきたということを、頭に入れておいていただきたいと思います。

お手元のレジュメでは大正区という場所というふうに表現していますが、開発や災害に翻弄された場所だったわけです。今回は、何故ここに沖縄出身者が集中したかとか、それが必然的であったのかどうかを話す用意はありません。今紹介しました歴史的経緯は、空間的系譜を重点において話をしました。ところがこの大正区の空間的系譜をもう一ついっておきますと、こういう立地条件が劣悪であったために戦前からスラムというような位置付けも与えられてきました。当時の写真をお見せしますと、これは1939年の写真ですが、まさしく3割が沖縄の人達が住んでいるといわれるバラック地帯です(図6)。大阪市は1937年に、全市で不良住宅地区調査をしましたが、その調査報告書の巻頭を

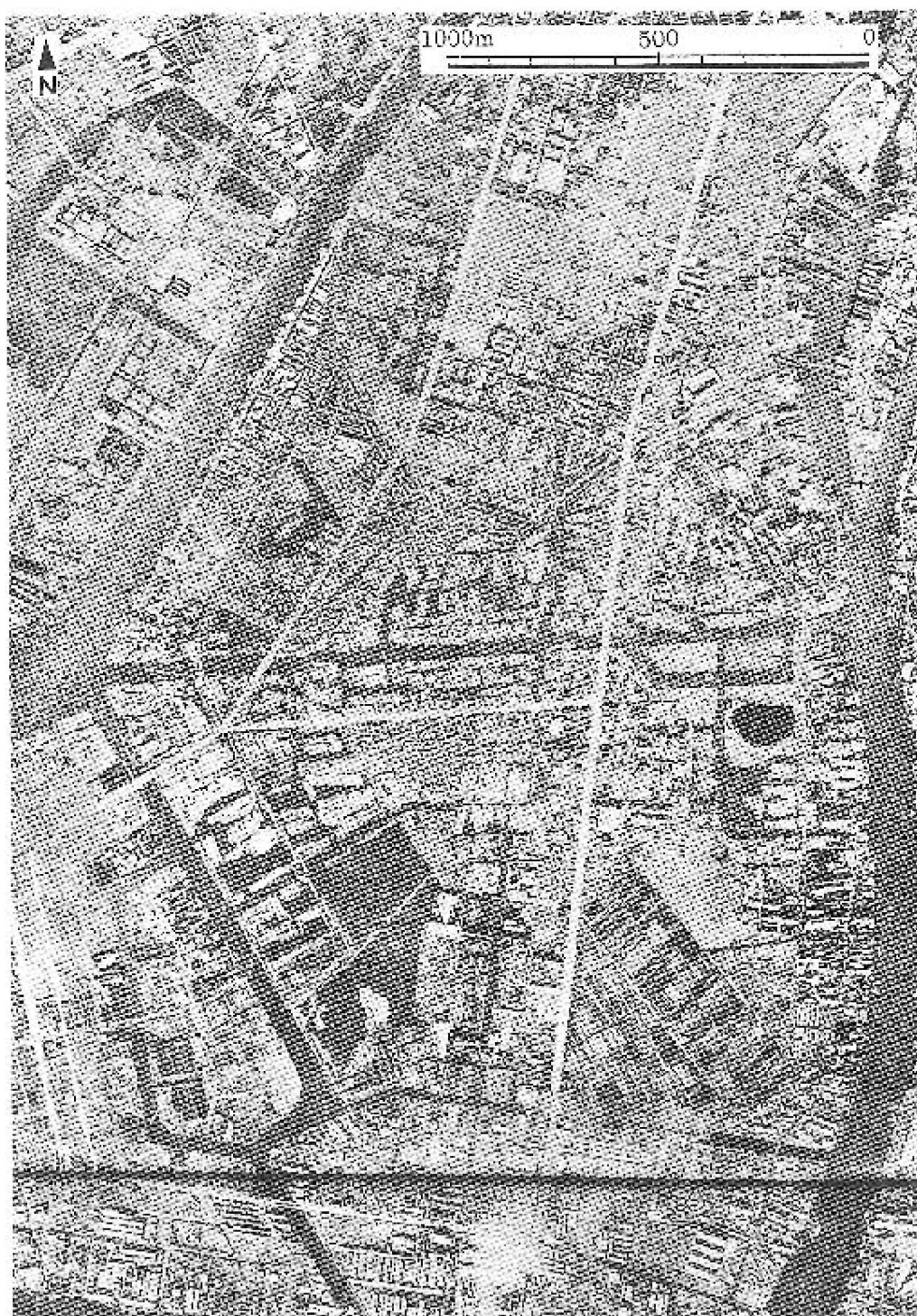


図4 空中写真で見る1947年の大阪市大正区（大阪市建設局 1994）

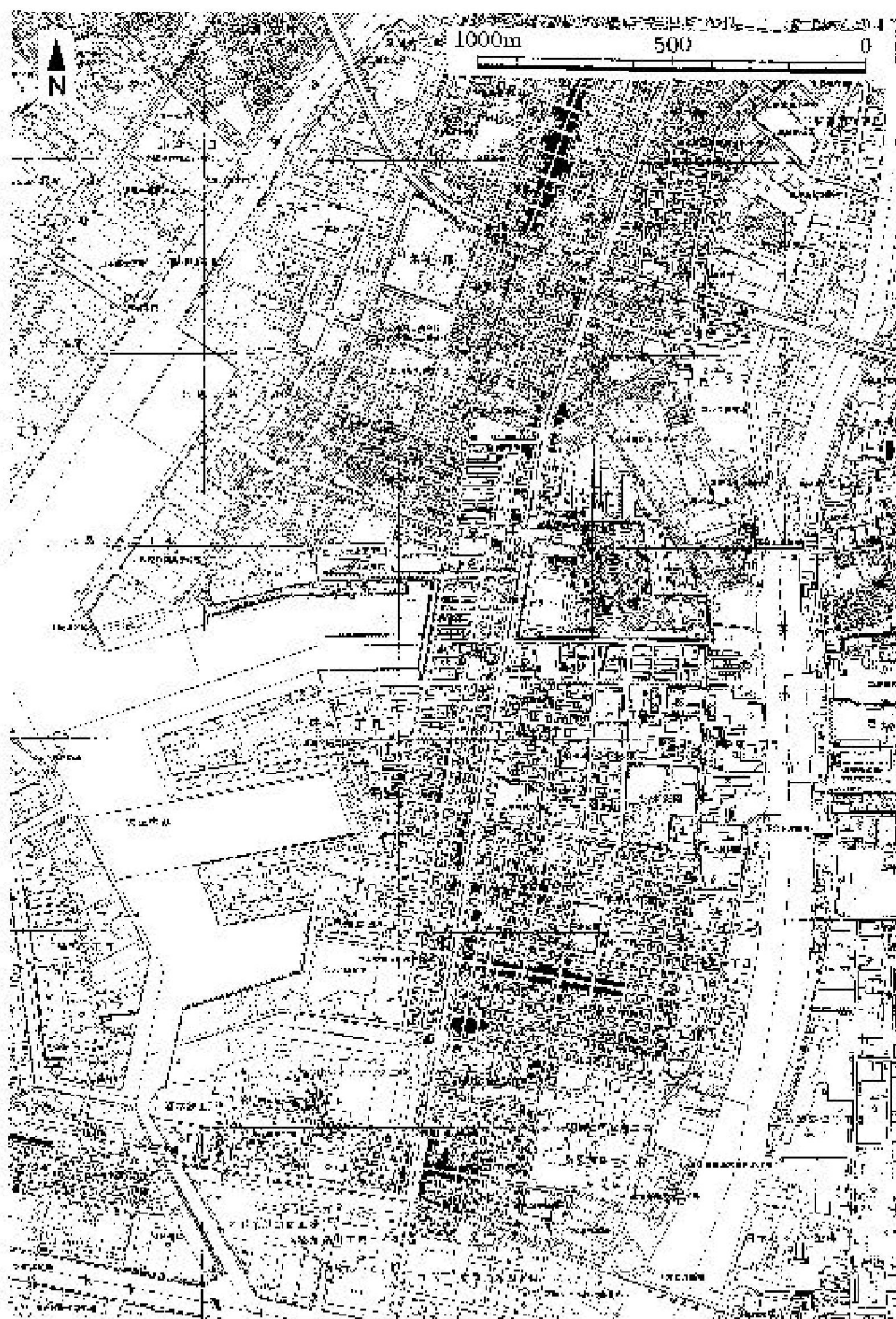


図5 地形図で見る1995年の大阪市大正区（平成7年測図1万分の1「大正」）

飾っているのが、実は小林町という沖縄バラック、この時は朝鮮人も1割か2割は居住していたのですが、戦前から大正区は居住環境的にみて劣悪な場所があり、特に沖縄の人が多い小林地区が巻頭写真に取り上げられたわけです。

これは戦後の写真ですが、このとおり、海面からみて2階部分がようやく見える、ですから、海面より以下が大正区であるというのがわかると思います（図7）。ここへ盛り土しようということで、ここに盛り土をこれだけしたら、どうしてもへこんでくる場所がでてきて最終的にこうして低く残ってしまったところが、沖縄バラック、沖縄スラムというエリアとして注目され始めます。そしてこうしたスラムを、不良住宅の問題として顕在化し、スティグマ化されてゆくということを頭に入れておいていただきたいと思います。

このように、1950年から大阪市は大々的な土地のかさ上げ事業をやっていったわけです。話をはしりますが、そのプロセスの中で、大阪、大正区に住んでいる沖縄出身者は、自分が沖縄出身であることを一切出しませんでした。差別は受けながらも、お金を



図6 1930年代後期の大正区小林町地区（大阪市社会部 1938）

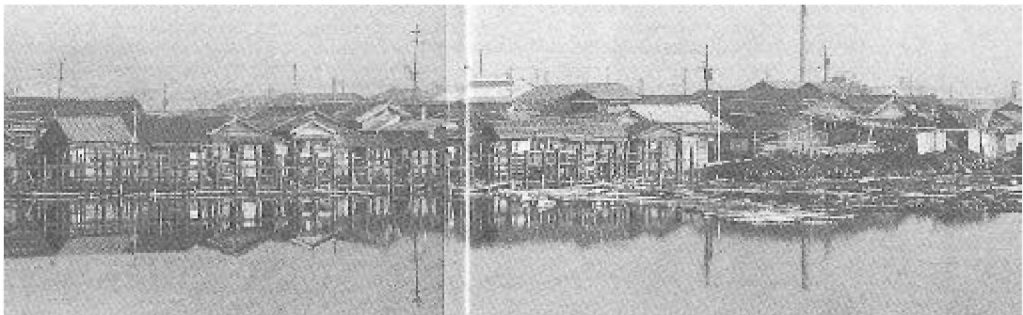


図7 1958年当時の盛土予定付近の住居（大阪市建設局 1994）

ためて立身出世することでひたすら沖縄を隠しながら、しかし家の中では踊ったりカチャーシしたりという世界があった、しかし沖縄を表出させなかったのです。ところがいつごろ沖縄が焦点をあてられるようになったかという、一つは、釜ヶ崎暴動、不法占拠という言葉が大阪市政の中で問題になってきた1960年代前半でした。釜ヶ崎暴動は1961年8月1日でしたが、その後あいりん地区と呼ばれますが、そういう暴動が起こる背景に、一つの社会環境、家庭の崩壊がある、社会の組織が崩壊している、この中で住環境の問題がスラムという形で、スラムという言葉が注目の的になってくるといった社会・都市病理学的な見方が有力になってきました。

それから、都市計画的に見ますと、将来の道路用地などに取っている空閑地には、バラックが建ったり、撤去されなかったりという不法占拠地区が昭和30年代には大量に存在していたのですが、これが高度成長が始まる頃に、ここはやはりスラム対策としてなんとかしないといけないのではないかという認識、政策形成がおきてきます。おりよくちょうど、住宅地区改良法というのが1960年に登場し、建設省がらみで、スラムクリアランスに対する大量のお金が投下される政策が施行されます。公共資金が不良住宅のクリアランスに向けられていくわけです。事実上その大部分は同対策事業の中の市営住宅事業という形で向けられるわけですが、ここで、同時に今まで全く行政から目を向けられていなかった沖縄スラムというのが自動的にスラムとして着眼されるという事態が起こってきます。

そのときの状況をレジュメに載せていますが、ちょっと読んでみますと、昭和40年代の話ですが、「危険な臨時防潮堤、鉄鋼埠頭から楓橋にかけてかなり海が広がることになるが、今そこは不法占拠の人達がたくさんいて、区画整理が遅れている。もう一つ下に、大阪市南西部大正区の片隅に沖縄スラムと呼ばれる一角がある。市の区画整理事業で造成されたままの空き地がそこに残りゴミが積もり草が伸び荒れ放題、再開発が進められている大阪の中で、忘れられている地域である。」（朝日新聞 1968）というような形で、沖縄というのはいわゆる上からの目で見られてくるという事態がおきてきます。「「沖縄部落」と呼ばれる1090戸を新しく作る千島町の公園南側に移転してもらい、跡地利用としては企業団地などを考えている」等々、それをやることによって大正区を住み良い町にしていきたいと。この中で、特に「沖縄部落」の住宅問題について、「改良住宅などで大阪市がすっきりした形にするのは結構だがまたざろ10年もすればスラム化していく。」（無署名 1969）。これは全部沖縄の人の発言ではなくて、大正区の区長、あるいは大正区の名士の方々が発言されている。ここでちょっと誤解を招いてはいけないのですが、大正区には沖縄県人会という大きな組織があります。戦前からエスタブリッシュされた組織です。よく言われることですが、これは兵庫県の人会とはまた異なり、大阪の県人会は名士層クラスが中心となっている。となると、沖縄スラムという一種の恥部になるような話は、明治、大正から大阪に来て成功した人にとっては醜い部分であり、触れたくない部分となりがちであり、ですから沖縄県人会はこの問題には関わってきません。むしろ既成の行政ルートや市会議員を通じて大阪市の行政と関係を有してゆくという路線を貫きます。

と同時にその次にレジュメでは、上からの視線、眼差し政策とありますが、ではこれは政策を打たないといけないということで、大阪市民生局、大阪市立大学が調査を始めました。わたしの大学は以前より、こうした市当局との関係を非常に近く持ち続けているそうした運命の大学で、調査のスタンスなど批判にさらされることも多かったのです

が、それから朝日新聞で報知される沖縄スラムは、かなり大きな記事で特集されます。それから井上さんというこれは大阪府の建築部の課長ですが、沖縄スラムについて、雑誌「住宅」に寄稿、それから大藪寿一という大阪市大の社会学の先生ですが、大阪市のスラムの実態ということで、「沖縄部落」に上からの目がいろいろと投げかけられることになります。その中で大阪府の井上さんはこう書いています。「今後であるが更に沖縄出身者が流入してくるとして、これは本土復帰以降流入してくるのではないかという意味ですが、本土での生活がスラムの中しかないとすれば、施政権、基地、本土生活の3重の差別の中でまた暮らすことになる、大阪市民であるかぎり大阪市としてなんらかの行政の手を差し伸べることは当然であり、ほか270世帯の沖縄以外の大阪市民も現在の社会体制で低所得者層にあまんじている。貧困がスラムを生み、スラムが無教育を生み無教育が貧困を生むというサイクルの悪循環を行政が断ち切る必要がある。そのためにも環境改善であり、それは住宅地区改良事業を行うことである。」(井上 1968)。これはある意味で、善意の発言に読み取ることも可能ですし、上からの押し付け的、大きなお世話的な話にもなります。しかしそうこう言っている時に、1969年11月、そして12月にあいついで沖縄バラックの大火が起こり、新聞にも大きく報道されます。これは私の発表予稿集12頁にも書いてあります。ちょうど同時期に住宅改良事業地区指定が行われますが、ここまでは完全に行政主導型で、ほとんど沖縄の人はここで関わってはいませんでした。ところがここから話が急にガラッと変わってきます。

住民側からの対抗運動の勃興という意味では、沖縄返還運動というのは非常に大きなキーになってきます。要するに沖縄イシューの高揚ということになるわけですが、その時、大正区の沖縄の人はどうしてたかという、これは私の聞き取りになりますが、「沖縄」世、烏合の衆といった悪いけども、みんなが集まると悪い習慣か、よってたかって胸のうつぶんを晴らすために夜通し起きていてカチャーシして、道からかえりよった。」(ヴォブク・ヴァディム 2000)。「沖縄人といって差別されるのは何もその人だけの問題でなく、沖縄と日本の社会的問題や、それなのにその人の個人的な問題で終始させられていると、だから差別、差別された怒りや悔しさが組織化されへん、みんな一人で、悶々と右往左往して結果、あげく、身近な家族とかに向けていくねん、ということで酒に走る、暴力をふるう、教育がなっとらん、という悪循環であったけども誰も立ちあがらへんと、悔しさが内包されてしまうと、カチャーシも決して外へ出て行かない、家の中でやってしまう。三線やるのも押し入れの中でしてしまうという形での沖縄を内に抱え込んでしまう。」(金城馨 1996)という状況があったわけです。ところが、当時の新左翼運動の興隆にも共鳴しながら1969年に沖縄青年友の会、これが大阪に登場します。機関紙、「石の声」を発刊し、沖縄差別を訴え自ら立ち上がり克服しようという声、2世、青年から起こってきます。1971年、関西沖縄県人差別問題研究会が、「沖縄差別」という雑誌を出します。これは沖縄出身の教員で大阪の小学校、中学校に勤めている教員の方が中心になってやり始めた研究会です。それから「沖縄県人の師弟の教育を考える会」もできます。

こうした教員を中心とした組織は、背景には、部落解放運動と密接に結び付いていました。要するに部落民への差別が、沖縄の差別と結びついていった。それがここで初めていわゆる公けに運動として打ち出されてくる。ちょうど1971年に「解放教育」という雑誌が登場しますが、これには、毎号に沖縄の問題が登場してきます。1969年には、部落解放同盟の出してる「解放新聞」でも、例の大火に対して、沖縄の人民に連帯をとい

う形で、支援物資を送ります。しかし送った支援物資は沖縄県人会が拒否したという有名なエピソードが残っていますが、沖縄県人会のほうは、このへんこうした青年や教員の動きに完全に対立する関係になります。要するに部落と沖縄を一緒にするなどという意識は、たとえば部落解放同盟が中心になって編集した、小中学校に配る読本「にんげん」という解放教育で大阪では絶対に使われる本の扱いに関して、登場してきます。この中で解放教育に関わっている沖縄出身の先生が一生懸命やったんですが、それを県人会は、使用しないようにと撤回させることを求めました。いまだに大正区の中学校ではこの読本「にんげん」は卒業式の時に配っているということで県人会に配慮しているところがあるわけですが、沖縄の一世と青年たちがここで決定的に対立するという事態が起こります。

もう一つ言いますと先程、1972年には盛んに、新左翼系の運動の流れがかわってきます。クブングワー闘争というのですが、バラックのところを窪地という意味でウチナーグチでクブングワーと発音するのですが、そこにオルグの活動に来るとかですね、大正区は元々労働運動の盛んな所で、戦前の全協運動とか、地域合同労組運動では活動的であったのですが、地域労働組合という性格があったので、場所的に集まってかなり先鋭的な運動をしていたわけです。また港区も含めて機械金属関係の労組の運動は、民社党の系列につながっていきまして、民社党系列の運動に対するシンパもありました。もう一つは徳田球一という共産党の元委員長が沖縄出身であるということも関係して、戦後直後の共産党シンパが多かったということもありました。インターナショナルと沖縄を前面に出すことの矛盾から、共産党は、この闘争に関しても共産党シンパの方ですね、沖縄出身であろうともこうした沖縄を前面に出す闘争には積極的には参加していないという非常にややこしいこともありました。それからもう一つ創価学会、公明党というラインも、スラムクリアランスに当たって便宜を計ることで、沖縄バラックにオルグが入るといった、政党的にもこんがらがった状況でした。ですから沖縄のコミュニティーは、こういう形で沖縄を前面に押し出す人、それから労働運動という形で自分が沖縄としてかかわっていく、沖縄人だけでも共産党としてかかわっていく、沖縄だけでも創価学会として自らを置くということで、1972年時点での北恩加島や小林、特に沖縄バラックの状況というのは非常にお互いに住民同士疑心暗鬼になって、移転もしないといけないう家もなくなる、しかし運動は政党がらみで、非常にややこしい状況におちいつていました（金城朝夫 1972）。

ちょうど、その当時の写真（図8）がありますが、それは沖縄バラックがほとんど取り壊された1977年のものです。改良事業がどんどん進んで、進んだ所には、大阪市がすぐ盛り土していきますから、残った所は窪んでいく状況で、西部劇の世界のような状況が、つい最近まであったわけです。そこにはナミエオバアという有名な方で、改良事業は一旦地区指定してしまうと、地区指定は1970年1月にやるのですが、そこで住んでいた人に対しては、改良住宅に入る入居権を与えるということになるわけですが、ナミエオバアは地区指定の後に入ってきたもので、改良事業では何の権利もないのです。権利がないこういう人がいると、たとえば酒飲みだからお前帰れということで沖縄に返すということもしたわけですが、こういう形で本当にどんどん歯抜け状態になっていた所に、これではだめだということで、1973年に関西沖縄解放同盟（準）という組織による地域闘争がこのクブングワーで始まります。

当時大正区にもウチナーたちの運動を作らなかあかんということで、「そのころは沖



図8 バラック住宅がほとんど取り壊された1977年当時の調査対象住宅地区（村田 1977）：
クブングワの立ち退き区域を覆うヘチマ、ニガウリのつる棚

縄闘争真っ盛りの時で、学生や労働組合、市民、どの集会へ行っても沖縄返還、沖縄奪還、沖縄解放といろんなスローガンを叫んでる、でも身近な大阪の大正区にこれだけたくさんの沖縄の人がいることも、その生活実態も知らない、知らないで沖縄闘争に勝利するとか言っていると。そして、大正区の沖縄の生活、クブングワに見られるように目茶苦茶ひどいのに、声上げてせえへんと。沖縄に出てきたウチナンチュは、出てきたこと自体、差別政策の結果なのですが、朝鮮人、琉球人、お断りという張り紙がある中でみんなかたまって住まざるを得なかったと、しかも仕事がきつくて汚れるものばかりで、これは差別以外の何物でもないのですが、「ウチナンチュはそのことを分かってへんと。自分は今、汚い所に住んでるけれども、努力してはい上がっていったらいいんやと。」（金城勇 1996）。これが県人会のエスタブリッシュされた人たちの考え方だと、批判してるわけですね。「そう思って辛抱してるんだと、それは結局自分だけよくなるということだと、その意識変えない限りあかんと、そのことを僕は深く解放運動から学んだ。」（金城勇 1996）という。これは関西沖縄解放同盟を中心的に支えて来られた人たちの発言です。そういうことで、オルグをせなあかんということで「クブングワ立ち退き問題を考える会」、住民要求などと一緒に、1975年に、「北恩加島・小林町の生活とくらしを守る会」というのを結成します。50世帯くらいです、既に100世帯くらいに減っていましたので、その中で沖縄の世帯が40世帯で、4割が沖縄の人で、2世帯が在



図9 移転先に建てられた改良住宅

日の世帯で、後は内地の世帯、主に四国の人が多かった。鹿児島も多かったのですが、そういう形で暮らしを守る会の活動をやる。街灯整備など、そして2番目が重要なのですが、不法占拠といわれて強制立ち退き、いわゆる無補償の人の権利を認めさせ、改良住宅に入れるという闘争ですね。それから土地権利関係が全く錯綜しています。私は税金払っているのに市の書類から土地の持ち主でないということになってくると、補償がなくて土地がもらえない、移転できないということが起こります。部落解放同盟の住宅要求闘争とはちょっと違いますが、こうした要求を起こしました。

この関西沖縄解放同盟の運動のスタイルというのは徹底して、ヤマトの人間と同調しない。ヤマトの人間とは距離をおく。沖縄闘争に関してはウチナーの人間でやると、これは沖縄返還闘争で、ヤマトの人間に引っ掻き回されたという教訓があったらしいのですが、沖縄であること、ウチナーンチュであることを前面に押し出そうという運動スタイルを取ります。ですから沖縄バラックはいろんな人が住んでいたわけですが、運動の中核はウチナーンチュが担います。事務所もウチナーンチュの住居を使います。沖縄差別があるから今の差別があるんやという、部落差別があるからというのと全く同じロジックで、それを交渉の前面に打ち出して、そしてその会を指導する、たまたま住民で主導的に動いた人たちは、かつて労働組合運動の経験があり、かつ沖縄出身の人だったので、そういう理解ある方がですね、粘り強く交渉して市役所に何度も行ってですね、座り込み闘争などもおこなって、最終的には要求を勝ち取ることになります。1014戸の改良住宅はこの写真のように高層で近くに建てられましたが（図9）、住宅地図で見ますと、1967年にはバラックの密集した状況が見られますが（図10）、それが73年にはこうした歯抜け状況になります（図11）。この歯抜けの状態の時に運動が開始されます。で、結果的には1978年の地図では見事に、すっかりとなくなってしまう（図12）。その後、その跡地に写真でみられるように、市の住宅供給公社の持ち家分譲マンションに変わっているということで、現状は見事にこのように変わっているわけです（図13）。

こうして1979年11月、最後の改良住宅への入居者が移転したということで、改良事業は事実上終了しました。先にも述べましたが、沖縄県人会とは全く没交渉というよりは敵対関係に近かった側面もありました。しかしながら、県人会の名士の人もですね、こ

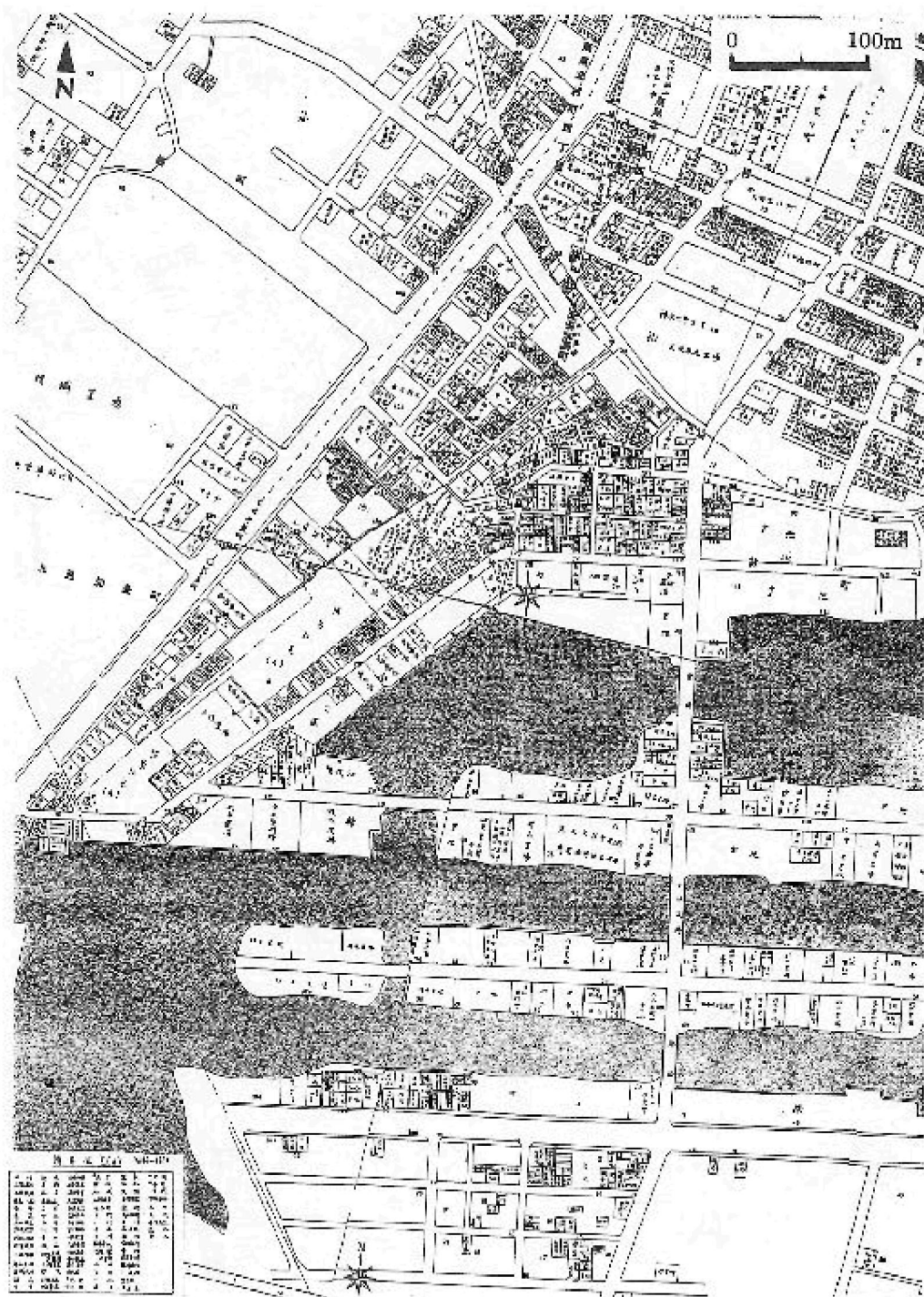


図10 1967年の北恩加町・小林町の住宅地図（吉田地図 1967）

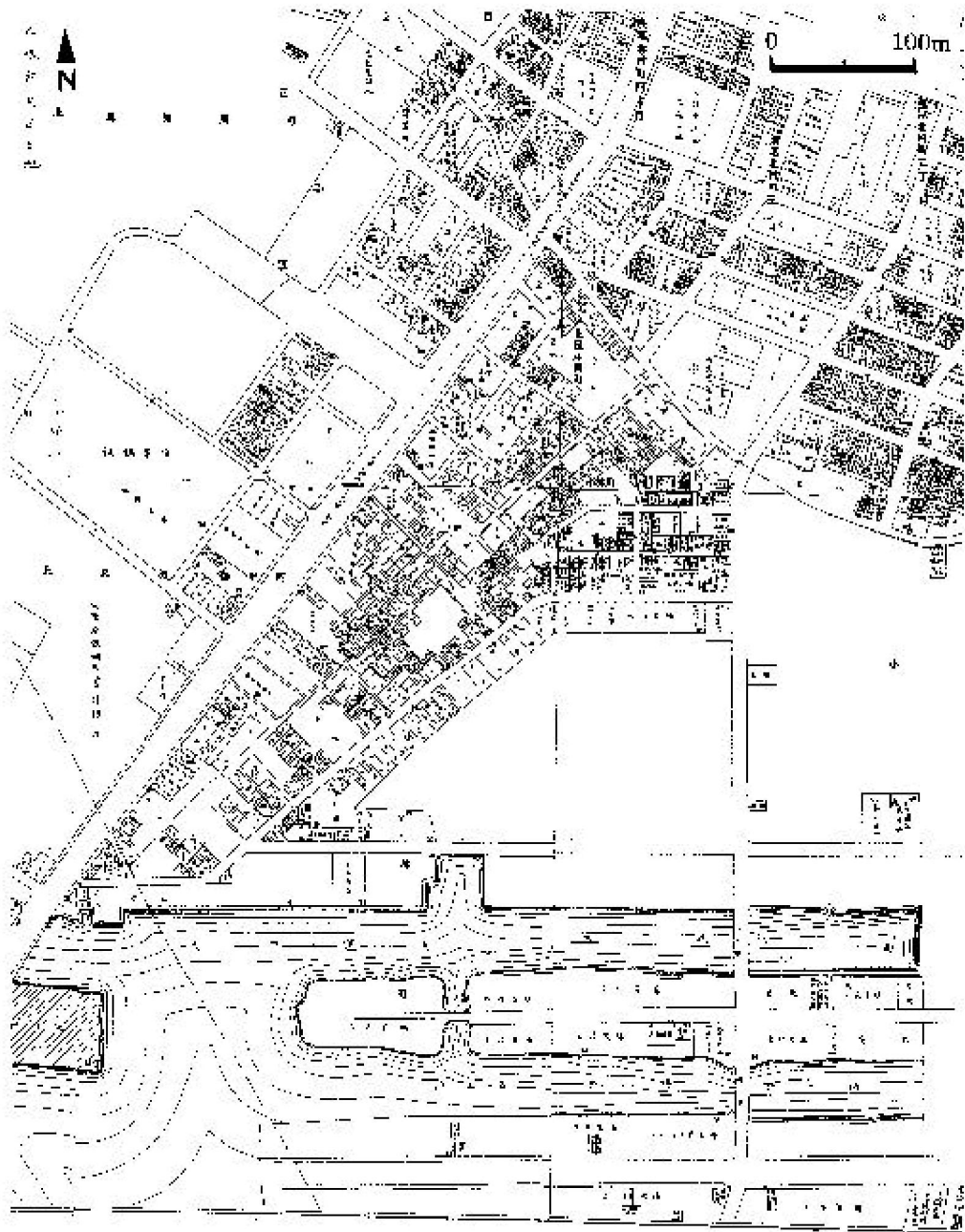


図11 1971年の北恩加町・小林町の住宅地図（吉田地図 1971）

うした大正区全体の立退き住民に対する当局の無責任，市民に対する最大の差別をご理解いただいたことを推察いたし移転することにいたしましたという，沖縄とは言われないのですが，市民に対する最大の差別であるということで，ものすごい土地への怨念を込めたことも言うておられます（大城 2000）。

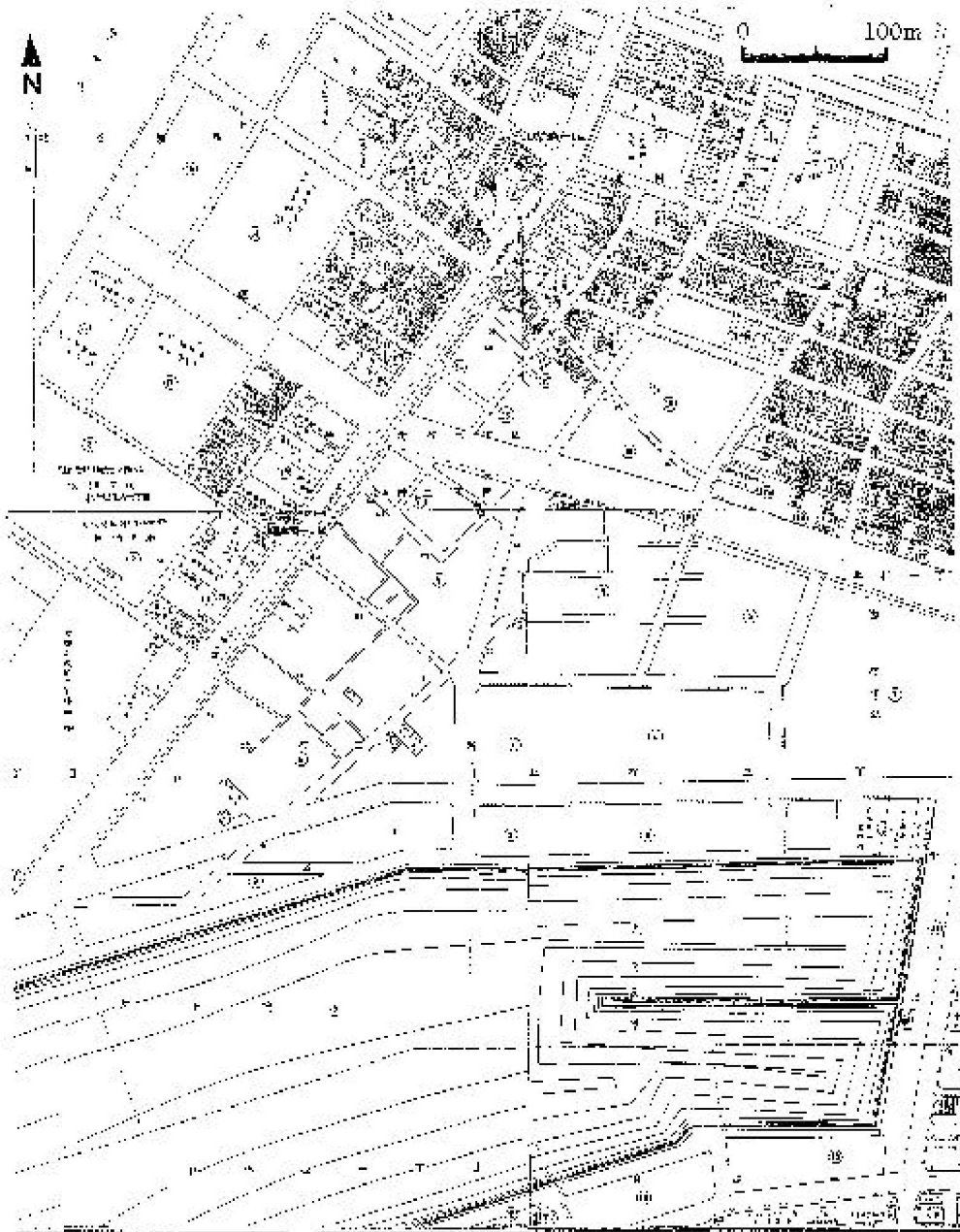


図12 1978年の北恩加町・小林町の住宅地図（吉田地図 1978）

この運動の特徴を言いますと、同和地区を除き、地域住民の要求の有無に拘わらず強引に推し進められたのが住宅改良事業であるということを考えると、強引という言葉は少し建設省や各自治体には申し訳ないのですが、逆に住民の方がエンパワーされて、行政闘争を行い、一定の成果をあげたこれは実に数少ない例であると思っています。事例



図13 かつてのクワングーの今の情況

としては京都市の松ノ木町，鶴見川河川敷，宇治市のウトロ，ウトロは裁判で負けていますが，いずれもこれは在日コリアンであるからということで，改良運動を住民側が立ち上げたところですね．ここでは沖縄というエスニシティが前面に出されたわけです．

一つ忘れていますが，広島基町の原爆スラムというのも，これは原爆という重い悲惨な出来事を背景に，いわゆるスラム改善事業が推進されたのですが，大阪の沖縄も，沖縄ということで一つの地域アイデンティティを打ち出して，住宅要求を行ったわけです．要するに，鹿児島県人会が，わたしら鹿児島だから差別受けてるから住宅改良せい，私は和歌山出身ですが，和歌山だから住宅改良せいというようことが起こしようもなかったような状況の中で，沖縄，在日，原爆というものが一つの地域のアイデンティティのより所になってですね，運動が行われたということとを，とにかく強調したいと思っています．

それは，次の部落解放運動も学びながら，徹底的に沖縄を前面に出して，沖縄差別を核として闘った，非常に稀な例なのです．要するに政党色も一切排除しています．沖縄だということで結集している，日本には非常に珍しい地域アイデンティティの強調が，ひとつの公共事業を獲得したということに注目したいのです．今日は触れておりませんが，こうした地域闘争と同時に文化闘争というのが同時に行われました．文化闘争と地域闘争を両立させながら，居住地改善運動を行うという，非常に稀な例です．文化闘争とは，今花開いています，先程言いましたし，ここにも載せてますエイサー祭り，今年（編者注：2000年のこと）の9月10日にもありましたが，第26回を迎えました．1975年始めた時は本当にぽつぽつとしか協賛は得られませんでした．今，大正区でも積極的に取り上げられ，また沖縄県人会はかつてのしこりがありますので，公けの形では出てきておりませんが，沖縄県事務所はずっと昔から協賛という形で，全国からエイサーを愛好する人たちが集まってきます．こういう文化の発信を担っているのが，がじゅまるの会であって，それが，今大阪の沖縄の人たちの運動を引っ張っています．

それから既成の沖縄県人会とは完全に一線を画していましたが，現在両者の関係は変わってきています．県人会会長を長くつとめられた宮城清市さんというのが，文化闘争を担ってきた「がじゅまるの会」で今年初めて講演をしました．これは，昔では考えられないことですが．要するに，今までの沖縄の県人会は，既成の町内会，市会議員，市役所，有力者を使う名士型ポリティクスをやってたわけです．しかし，今日紹介した運

動は明らかに草の根型の、日本の既存の政治手法、都市ポリティクスは使っていない非常に珍しい例です。しかし、現状となるとですね、戦う目標は事実上改良住宅を獲得した1979年以降、具体的ではなくなっています。子供会活動は昔は非常に盛んで、子供に三線を教えて、沖縄に教えに行きます。沖縄では方言はもちろん、子供は三線も知らない、で、大正区の子供が三線を弾くとはすごいことだという話になったというほど、大きなインパクトを与えた大正区の子供会活動だったのですが、なかなかその担い手が、そして指導者も少なくなってきたという現状もあるようです。

最後にしめくくりますと、「最近の沖縄から来る若い人達を見ていると、皆物おじしなくて表情も明るい、周りにも自分をうまく合わせてやわらかく入っていくと、それは僕らの世代にはなかったものです。周りにはなじめず、かたくなで、だからしんどかった。今の若い人達には、沖縄の青年よ集まれというような会は必要なくなっているかもしれないですね。」(玉城 1996)。

私はわずか1年程出入りしているにすぎませんが、いわゆる沖縄ブームでいろんな人が集まってくる中で、ウチナーの人が、大阪で沖縄を自分のアイデンティティの拠り所にしなが運動を盛り立ててゆく手法をいろんな形で模索したえずオータナティブな発信をしてゆく、ある意味でしんどい時期にさしかかっていると言えるのではないのでしょうか。それは私の住む街、あるいは関わりをもっているまちづくり運動の今後を含めて、自分の問題でもあるということを描き終わりにしたいと思います。

引用文献 (著編者五十音順)

- 井上正義 1968. 「沖縄スラムについて」 住宅, 1968年9月号, 18～23頁.
- ヴォフク・ヴァディム 2000. 「本土における沖縄県出身者の定住地について——大阪市大正区を事例にして——」 大阪市立大学大学院文学研究科1999年度提出修士論文.
- 大阪市建設局 1994. 『わがまち・大正/住之江』 大阪 大阪市建設局.
- 大阪市社会部 1938. 『本市における不良住宅地区図集』 大阪 大阪市社会部.
- 大城眞榮 2000. 『人生は八十五歳から』 私家版.
- 金城朝夫 1972. 「ルポ——見捨てられた沖縄——北恩加」 流動 5, 158～164頁.
- 金城 勇 1996. 「オキナワ イズ ナンバーワン」(太田順一編『大阪ウチナンチュウ』 大阪 ブレーンセンター, 88～93 頁).
- 金城 馨 1996. 「負きーみい」(太田順一編『大阪ウチナンチュウ』 大阪 ブレーンセンター, 94～99 頁).
- 玉城利則 1996. 「どっこい語り部」(太田順一編『大阪ウチナンチュウ』 大阪 ブレーンセンター, 123～128 頁).
- 無署名 1969. 「地元の声 大正区」 大阪人 23巻, 204-205頁.
- 村田主計(撮影) 1977. 差別とたたかう文化 3, 表紙写真.
- 吉田地図 1967. 「大正区」(『住宅地図』) 大阪 吉田地図.
- 吉田地図 1971. 「大正区」(『住宅地図』) 大阪 吉田地図.
- 吉田地図 1978. 「大正区」(『住宅地図』) 大阪 吉田地図.

(新聞記事)

朝日新聞1968年7月15日

質疑応答

郷地：鹿児島国際大学の社会学の郷地（ごうち）と申します。今大阪の沖縄の町についてのお話を伺いました。大阪は、ほかの地方の出身者たちも移住してくるような都会ですね。今のような高層住宅になったことに関連してほかの例を申しますと、イギリスのイーストエンドがあります。イギリスの場合はほかの国からの移住者も多いのですが、イーストエンドもある面でスラムだったわけですが、高層住宅になったり、さらに社会福祉とかいろんな面で良い政策をしていくために、そういうようなある面ではそれがモデルになっていくような、つまりかつてはスラム化していた、ところが大阪の政策によって住宅政策が進むと同時に、多分ほかの政策も進んでいると思うのですが、保育であるとか社会福祉センターであるとか、そのあたりの事情について、もしご存じでしたら教えてください。

水内：改良住宅がどういう状況になっているかということをお話しすればいいわけでしょうか。基本的に改良住宅は地区指定した1970年1月の時点での居住している人とその係累、子孫、親戚しか入れないので、基本的に、入居資格はそういう人に限られているわけです。それが空き枠が出て来たときに一般募集をする形になりますが、泉尾のこの改良住宅の場合はまだ空き枠募集までいってないので、自分の息子とかの人が入っているのが現状です。またスラム化しているということは一切ありません。非常にいい環境で、普通の市営住宅の形での維持をしています。ただもうひとつの千島の改良住宅では、クブングワーにあった保育所が併設されています。

郷地：そういう文化が、ある面ではそこに継承されていくのでしょうか。

水内：先程のエイサー祭りだけではないですが、今大正区というのは、何を打ち出そうかというとはやはり、商店街でもシーサーとか置かれていますし、商店街の改造計画を立ててもお金がないとできないのですが、大阪では沖縄というものをポジティブにとらえる、大阪では在日コリアンの方が先をいっていますので、コリアンタウンができていますけども、沖縄タウンを作ってしまう形でも、昔の差別とかそういうことが消えたところで街づくりが行われている、そういう形で、沖縄の人が同時に大阪市民として積極的にかかわっていく人はいます。